

李白「静夜思」その後

森 瀬 壽 三

はじめに

以前に李白「静夜思」について二三の論考を試みた。一九八九年（平成元年）の「李白『静夜思』をめぐって」（関西大学文学論集第三十八号第三・四合併号）および一九九〇年（平成二年）の「李白『静夜思』をめぐって（承前）」（関西大学文学論集第三十九号第三号）がそれである。これに関連して一九九三年（平成五年）に「李攀龍『唐詩選』藍本考」（関西大学文学論集第四十三号第二号）を世に問うた。そしてこの間、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学文学部東洋学科における講演（一九九〇年五月 英語）、中国上海の復旦大学中文系における講演（一九九〇年十月 日本語）、中国南京大学での唐代文学国際学術討論会席上の口頭発表（一九九〇年十一月 中国語）、中国蘇州大学中文系における講演（一九九一年二月 中国語）、そして帰国後に大阪で『泊園記念会』の講演（一九九四年十一月）を行ない、それら論考の趣旨を人々に語ったが、後日その一部は「*ORIENTALIA LOVANIENSIA PERIODICA 22*」（1991）『唐代文学研究 第三輯』（広西師範大学出版社 一九九二年）および『泊園 第三十三号』

(一九九五年五月)に全文あるいは要旨が掲載された。また一九九八年に上梓した小著『唐詩新攷』(関西大学出版部刊)にも前掲論文を収めた。

一

それらの論考で得た結論を都合上ここで改めてまとめてみると以下のようなになる。

一 李白「静夜思」の本文中「牀前看月光」の「看」、および「擧頭望山月」の「望」という動詞、それに「山月」の語は、この詩の構造上、重要な働きをしている。

二 明代の李攀龍『唐詩選』(万曆刊本)で初めて第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が用いられたが、それ以前の版本で、第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作るものは、別集・総集を通じて皆無である。

三 江戸元禄期における服部南郭の和刻本李攀龍『唐詩選』では、他の版本を参照して原文どおり「牀前看月光」「擧頭望山月」の文を用いており、これが『唐詩選』の流行とともに日本では伝承された。

四 中国では李攀龍をはじめとする古文辞派衰退後も多くの版本で、第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が用いられたが、やがて清朝に入り『四庫全書総目提要』で李攀龍『唐詩選』が「偽書」と指弾されると、李攀龍『唐詩選』は存在さえ無視され、代わって蘅塘退士『唐詩三百首』が流行するに及んで、李白「静夜思」は、「夜思」という篇題のもとに第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が受け継

がれ、以後の中国で暗誦用のテキストとして現在まで世界中の中国人によって伝承されて来ている。

五 李攀龍『唐詩選』は、万曆三年（一五七五年）の刊本が浙江省寧波の天一閣にかつて所蔵されていた記録があり、「偽書」とすることは出来ない。

以上が論考の骨子である。「牀前看月光」「擧頭望山月」の文が明代において「牀前明月光」「擧頭望明月」に置換えられた原因については、論考にも触れたことだが、「看」の字音が唐代に平声であったものが、後世に仄声が主となり、平仄式が近体詩のそれに等しくなるのを嫌ったことに因るのであろうし、第三句に「明月」を用いるのは、「看る」という動詞が無くなることによる第四句から第一句への回帰循環構造を補う働きを目的としたのであろう。

結局、我が国で服部南郭が李攀龍『唐詩選』を翻刻するに際して、本文の改竄を温存する必要がなかったのも、我が国の唐詩鑑賞が「訓読」によって行われることと関わると言えよう。しかしながら、爾来中国の人々はその愛唱する李白「静夜思」の本文が李攀龍『唐詩選』に由来することもすっかり忘却の彼方に追いやり、日本人が愛好する「静夜思」の李白本来の本文を見て嘲笑するという「情けない」事態を現出している。そして、この「誤解」が単に一般大衆のみならず中国の専門家にも深刻な状況をもたらしているのは重大なことと言わなければならない。

二

この問題は、ただ単に李白の絶句という短詩一首の本文二字の考察という瑣末な事柄を云々しているように見えて、その実、中国文化の重要な側面、そしてまた中国人による（ひいては外国人による）中国文化研究の重大な欠陥に関

わる要素を露呈しているように思えてならないのである。

まず上記の論考発表においてもっとも印象的であったのは、一九九〇年十一月に南京大学を会場にして行われた「唐代文学研究国際学術討論会」と銘打つシンポジウムの分科会席上での記憶である。この年に筆者は大学から一年間の在外研究を命じられて上海の復旦大学に滞在していた。前年の五月に次年度の在外研究が会議で承認され内定した時には、一年間北京（中国社会科学院文学研究所）で過ごすつもりであった。それが、六月四日の「天安門事件」で不可能になった。そこで急遽予定を変えてベルギーのルーヴェン・カトリック大学文学部と上海復旦大学中文系での五ヶ月と七ヶ月の滞在に切り替えざるを得なくなったのである。中国への滞在ビザもブルッセルの中国大使館で受け取るという始末であった。復旦大学で受け入れてくれたのは、仏教文学研究の優れた研究者陳允吉教授であった。陳教授の計らいで、十月に中文系の研究者を対象にした講演会を開いてもらい、十一月のシンポジウムへの出席の誘いを受けた。十月の講演会は、優れた日本語通訳者であり中国古典研究者である邵毅平氏の同時通訳で李白「静夜思」の本文について論考の要旨を話した。その席には重鎮である王運熙教授はじめ章培恒教授・王水照教授・李平教授・顧易生教授など錚々たる顔ぶれが並んでいて緊張したが、講演後の挨拶の中で、通訳の邵毅平氏の口を通して王運熙教授は筆者の論旨に賛同する旨を表明された。これは最初の中国の専門家からの反応として大いに心強いものを得た記憶である。

ところが、それから一ヶ月ほどした南京大学でのシンポジウム分科会では、李白などの専門家ばかりの席上にも拘わらず、同様の趣旨の発表に対して質問・意見の表明は一切なかった。中国文を「宣読」したのを十数人の専門家が理解できないはずなのに、完全に押し黙って数分が過ぎた。同席していた松浦友久教授が堪りかねて中国語で

「中国の先生方はいかにお考えでしょうか。」と発言を促したが、やはり誰一人として発言をする者はいなかった。この場の異様な雰囲気こそ、中国の研究者にとって李白「静夜思」の本文の異同の問題が、一種のタブーとして重くのしかかっている事実を物語っている、と後になってしみじみと理解できたのであるが、当時はただ呆れはて、「これが国際の名を冠したシンポジウムか。」と憤ったものである。

三

その後の状況はといえば、以下に紹介するようにはほとんど事態は変化していない。一外国人研究者たる筆者の寥々たる報告が中国の専門家に与える影響などは取るに足りないものかも知れない。しかし、かつて私自身が気づかぬ内に論考が次々とフルペーパーで翻訳されていた事実を、中国の或る大学の翻訳者から雑誌のページの切り抜きを送られてはじめて知り驚いたことを考えると、この問題を中国の研究者が何らかの形で意識していることは十分に推察できる。一九八六年に初めて中国の土を踏み、その直前に起こった「李賀『秦王飲酒』論争」の内情を知りたくて、「秦王『唐太宗説』」の提唱者の先鋒たる胡念貽氏に、それ以前に発表した拙論を知っていたか尋ねようと、氏の所在を中国社会科学学院文学研究所で質したところ、「先週亡くなられた。」ということでは会えなかったが、直後に訪問した北京図書館の蔵書カードの中に、『入矢教授小川教授退休記念論集』の所蔵を確認したことは記憶に残っている。「秦王『唐太宗説』」の発端となる一九七四年の拙論「李賀『秦王飲酒』をめぐって」を収めていた書である。

少なくとも、前述のように復旦大学の御所王運熙教授には、李白「静夜思」の本文に関する拙論の要旨を直接聴いて頂き、賛同を得ていた。また、小著『唐詩新攷』の何冊かを内外の研究者や研究機関・図書館に寄贈した。その

一人に、後述の中国北京の清華大学葛兆光教授も含まれている。葛教授夫妻が来日した時に拝眉を得た教授の夫人は、見事な日本語の使い手であった。それら中国の碩学・気鋭を含めて、中国の研究者がこの十年間に李白「静夜思」の本文の異同について触れたものを、幾篇か手元に集めてみると、やはり暗然たる気持ちに陥らざるを得ない。

最近まで、この問題に関して管見に入った資料は以下の五冊の書である。

- ① 郁賢皓主編『李白大辞典』 广西教育出版社 一九九五年一月刊
- ② 傅璇琮主編葛兆光選注『中国古典詩歌基礎文庫 唐詩卷』 浙江文芸出版社 一九九六年五月刊
- ③ 詹鍔主編『李白全集校注彙釋集評』 百花文藝出版社 一九九六年十二月刊
- ④ 馬鞍山李白研究所編『中国李白研究 一九九七年集』 安徽文芸出版社 一九九八年十月刊
- ⑤ 安旗主編『新版李白全集編年注釋』 巴蜀書社 二〇〇〇年四月刊

以上、著者と書名から見て大衆向けの書物ではなく、専門家ないし研究者・学生向けの所謂「専門書」の範疇に入る書物ばかりである。以下、それぞれの関係する個所を抜粋して紹介してみよう。

① 郁賢皓主編『李白大辞典』 广西教育出版社 (四三二六頁 執筆担当〓王運熙教授)

この詩の第一句と第三句は版本によって字句の異同がある。宋代以来の各種の『李太白集』と比較的古い総集たる郭茂倩の『樂府詩集』・洪邁の『唐人万首絶句』などの書は、第一句をすべて「牀前看月光」に、第三句を

みな「擧頭望山月」に作る。「看月光」が「明月光」に変わるのは清朝の選本王士禎『唐人万首絶句選』・沈徳潜『唐詩別裁』に見え、そのご蘅塘退士『唐詩三百首』は「望山月」までも「望明月」と変えてしまった。この改変は（中華人民共和国成立後の選本を含み）以後の唐詩選本に踏襲された。版本の沿革過程からみて、恐らく原文は「看月光」「望山月」とすべきだろう。ただ清朝のいくつかの選本とくに『唐詩三百首』が広汎に流行したため、現在人々が慣れ親しむのは「明月光」「望明月」になった。（中略）清朝人は「看月」「山月」の二個所をすべて「明月」に変えた。原形と合わないが、しかし芸術的には確実にこちらが優れる。このように改変すると詩により奥行きと韻律美とをもたらし、より普遍性を与え、広汎な読者に喜びを与え、受容を容易にする。あまつさえ上の文で紹介したように古えの多くの詩歌も静かな夜に故郷を思い人を偲ぶことを述べるのにみな「明月」を用い、すでに一種の慣習となっている。「静夜思」は、人民が口頭で創作したものではないが、しかし、その伝承の過程で改変され、この改変がまた群集の受容するところとなった。その変化は、しかし口頭での創作のようであり、我々は現在選本を編纂する際にふたたび古人の詩に戻すことには賛成しない。逆にこれを一つの効果のすぐれた既成事実と認めることができる。

（本篇第一句第三句、不同版本在字句上有些差异。宋代以来的各种《李太白集》和较早的总集郭茂倩《东府诗集》、洪邁《唐人万首絶句》等书、第一句都作“床前看月光”、第三句都作“擧头望山月”、“看月光”变成“明月光”、见于清人的选本王士禎《唐人万首絶句选》、沈徳潜《唐詩別裁》、以后蘅塘退士《唐詩三百首》、连“望山月”也改成“望明月”。这种改动为以后的唐詩选本（包括解放后的选本）所遵用。从版本发展过程看、恐怕原貌应是“看月光”、“望山月”。只因清人这几种这本特别《唐詩三百首》流行广泛、所以现在大家所熟悉的是“明月光”、

“望明月”了。……清人把“看月”、“山月”两处都改成“明月”、虽然不合原貌、但在艺术上的确胜一筹、这样改动、使诗歌更含蓄有韵致、更带有普遍性、为广大读者所喜爱和易于接受。何况、如上文所介绍、古代不少诗歌写静夜思乡怀人、也都用“明月”、已经形成一种习惯了。《静夜思》虽然不是一首人民口头创作的、但它在流传过程中受到改动、这种改动又为群众所接受、其情况倒有些象口头创作。我们不赞成现在编选本时再改动古人的诗、但得承认这一效果良好的既成事实。）

② 傅璇琮主編葛兆光選注『中国古典詩歌基礎文庫 唐詩卷』浙江文芸出版社（一五七頁）

この詩は「牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故郷」と作る本もある。比較的信頼できる古い版本によればそうなのだが、しかし現在用いられているものの方が良い。なぜなら二度出てくる「明月」は決して重複感がなくて循環性を表出しており、しかも「看」の文字の「望」の字との重複を回避している。

（这首诗一作“床前看月光、疑是地上霜、举头望山月、低头思故乡”。据说还是比较古老和可靠的版本、但不如现在通行的好、因为两次出现的“明月”并不显得叠出而显出回环、而省去的那个“看”字却避免了与“望”字的重复。）

③ 詹鍇主編『李白全集校注彙釋集評』百花文藝出版社（八九八頁）

【校記】「看月光」各本と李白別集はいずれも「看月光」に作る。王士禎の『唐人万首絶句選』と沈德潜『唐詩別裁』及び『李詩直解』では「明月光」に作る。「山月」各本と李白文集はいずれも「山月」に作るが、蕭士贇

の注は『古詩』「明月何皎皎」を引き、また魏文帝詩「仰看明月光」を引く、蕭氏が「山月」を「明月」にしたようだが、しかし本文は「山月」のままである。『李詩直解』及び『唐宋詩醇』は「明月」に作る。

【校記】「看月光」各本李集均作看月光。王士禎『唐人万首絶句選』、沈德潜『唐詩別裁』及『李詩直解』作明月光。「山月」各本李集均作山月、蕭注引『古詩』「明月何皎皎」、又引魏文帝詩「仰看明月光」、似蕭氏以山月爲明月、但刊本仍作山月。『李詩直解』及『唐宋詩醇』作明月。

そして、この書は九〇二頁に【備考】として「日」森瀬壽三『關於李白〈靜夜思〉』（載『唐代文學研究』第三集廣西師範大學出版社一九九二年出版）とのみ記す。

④ 馬鞍山李白研究所編『中国李白研究一九九七年集』安徽文芸出版社（二七四～二七五頁 張天健氏の「李白『靜夜思』之我見」と題する論文）

この「靜夜思」については、日本静嘉堂文庫蔵本『李太白文集』さらに宋の人郭茂倩『樂府詩集』・洪邁の編纂した『唐人万首絶句』まで、二個所に少しく異同があり、第一句は「牀前看月光」に作り、第三句は「擧頭望山月」に作る。以後、元の蕭士贇の『分類補注李太白集』・明の人高棟の『唐詩品彙』はみなこのような文字であり、これが本来の文であることを証明している。清朝の康熙時代に編纂された『全唐詩』と王琦の集注した李太白の文集では、詩はまだ原形を保っているが、しかし多くの選本、たとえば沈德潜『唐詩別裁』・王士禎『唐人万首絶句選』・乾隆御撰の『唐宋詩醇』では、第一句は「牀前明月光」に改めるが、第三句はまだ改めない。蘅塘退士孫沫の編纂した『唐詩三百首』では第三句まで「擧頭望明月」に改めた。この選本は広汎に流布し、影

響は極めて大きく、いま各種の唐詩選本と李白詩の選本はすべて『唐詩三百首』の文を本文としていて、人々はこれを李白の原作と考えている。この改変を考えると、そこに必ず優劣の問題が横たわっている。第一句を味読すると、「牀前看月光」は「看」という動詞（実辞）を持ち、語気が沈滞する。そのうえ月光は具体性を欠き散漫となる。どうしてわざわざ「看る」としなればならぬのか。もしどうしても「看る」としなればならぬとするならば、次の句で「霜」と間違えることなどあり得ない。「明月光」と改めれば、白い光が地にそそぎ、いやがおうでも眼に入り、次の句の「霜かと疑う」を引き出すのであって、きわめて理にかなっている。「明」の字を用いれば、月を看るのは虚中から実を見るのであり、「明」の字はまた月の明るさを描き出す。第三句を「擧頭望山月」と作るのは、「山」の字が地理的な範圍を狭くし、明らかに平板で限定的であるが、「明」の字は無限の範圍を包みこみ、人に思いを馳せさせる。「明月」が「山月」より優れるのは自明である。

（对于这首《静夜思》、据宋刊日本静嘉堂藏本影印《李太白文集》、以及宋人郭茂倩所编《乐府诗集》、洪邁所编《唐人万首絶句》、均有两处稍异、第一句作“床前看月光”、第三句作“擧头望山月”；以后元萧士贇《分类补注李太白集》、明人高棅《唐诗品汇》都是这样的文字、这证明可能是诗的原貌。至清、康熙时编纂《全唐诗》和王琦辑注《李太白文集》中、诗还保留原貌。但在各家选本中、如沈德潜《唐诗别裁》、王士禛《唐人万首絶句选》、乾隆御定《唐宋诗醇》中、第一句变成了、“牀前明月光”、第三句未变、及至蘅塘退士孙洙编《唐诗三百首》连第三句变成了“擧头明山月”。此选本流传久远、影响巨大、今之各类唐詩选本和李詩选本、都以《唐诗三百首》文字为本、人们也习以为此是李白原作。考此诗改变、必有高低因由、品味首句、“牀前看月光”着一个实词“看”、语气沉滞、而且月光散漫无形、怎么特地去“看”、若真要特地去看、也就不会有下句错当成“霜”。换成“明月

光”、那么银光泻地、是不经意入于眼中、下句引出“疑霜”、也很自然合理、用“明”字、看月是从虚中见实、“明”字还描述了月的亮色。第三句作“举头望山月”、“山”字囿于地理局限、显得较死较实、“明”字涵盖不限范围、引人驰想、“明月”自然比“山月”为佳。

なお、二〇〇四年九月刊の『唐詩答疑録』（中国文聯出版社）においても張天健氏は、右と同じ文を掲載している。

④ 安旗主編『新版李白全集編年注釋』巴蜀書社（八九頁 開元十五年に編年）

【注釋】「一」瞿（蛻園）、朱（金城）は云う、「各本と李白文集はみな「看月光」に作る。王士禎の『唐人万首絶句選』及び『唐詩別裁』はともに「明月光」に作る。恐らく王士禎が勝手に改めたのだろう。」と。「二」山月、『唐宋詩醇』は「明月」に作るが、いいかげんな改竄とすべきである。（瞿、朱∥瞿蛻園、朱金城校注『李白集校注』上海古籍出版社一九八〇年刊）

【注釋】「一」瞿、朱云、「各本李集均作看月光。王士禎『唐人万首絶句選』及『唐詩別裁』均作明月光、疑為士禎所臆改。」「二」山月、『唐宋詩醇』作明月、當為臆改。）

以上のように、近年の中国の研究者による李白「静夜思」の本文に対する見解は、一定の範囲内ではほぼ同一平面上にあると言える。その共通する見解をまとめてみると以下のようなになる。

- 一 李白「静夜思」の本来の本文は「牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故郷」である。
- 二 その本文を改めたのは清朝人であって、蘅塘退士『唐詩三百首』がこれを広めて現在に至る。

三 (現在、中国人社会で用いられている) 改められたその本文「床前明月光、疑是地上霜、挙頭望明月、低頭思故郷」の方が、本来の本文より文学的に優れている。

四

中国の人々がもっとも好む唐代詩人といえば、李白であることは論を待たない。そして李白の数多くの詩篇のなかでも人口に膾炙しているのが「静夜思」であるとも言えよう。その本文を「牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故郷」であるとする自覚が研究者達の中に定着したのは、やはり近年のことと言えるだろう。例えば、かつて拙論に引いたごとく、一九五四年刊の林庚著『詩人李白』(上海文藝聯合出版社)における「蕭本では第三字の『明』を『看』に作り、第十四字の『明』を『山』に作る。しかし、洪邁の『万首唐人絶句』では、第十四字を『明』に作っている。洪邁の方が蕭士贇よりも約百年も早いから、蕭本は信じがたい。おそらく二個所とも『明』であったのを蕭本が改めたのであろう。」という、書誌学の初歩を無視した見解はかなり影を潜めた。これは中国の学界にとって喜ばしいことと言わなければならない。

しかしながら、どうにも合点がゆかないことが二点残る。ひとつは、中国の人々が現在暗誦している「静夜思」の本文が李白本来のものでないと認めつつも、なお「明月」を重ねる改竄後の本文の芸術性を、いろいろ理屈をつけて称揚することであり、二つめは、改竄したのが明代の李攀龍『唐詩選』であることを絶対に認めないという点である。

ひとつめの問題であるが、尊敬する王運熙教授も、この点では上に見たように実に苦渋に満ちた解説をしている。

『静夜思』は人民が口頭で創作したものではないが、しかし、その伝承の過程で改変され、この改変がまた群集の受容するところになった。その変化は、しかし口頭での創作のようであり、我々は現在選本を編纂する際にふたたび古人の詩に戻すことには賛成できない。逆にこれを一つの効果のすぐれた既成事実と認めることができる。」という。その場合、ここでいう「古人」とは「静夜思」の作者たる李白その人に他ならない。李白が作った詩歌を、後世の「人民」が改変して愛唱しているのだから、作者李白の原文よりも芸術性に優れるという論法は、いわば社会主義的な発想とも言える。しかし、拙論でも紹介したが、かつてこの論考を台湾出身の大学院生に語ったところ、論旨には納得したが本文を変える事は出来ないという。その理由として「師承の問題がありますから。」と言った。一概に社会体制によるものとは言えず、中国人社会全般の現象である。

「看Ⅱじつと見つめる」という動作があるからこそ、いつの間にか白く地面を照らす月光を地上に降りた霜かと錯覚するのであり、第四句の「頭を垂れて故郷を思う」動作が、第一句の「うなだれて床面を見つめる」動作への回帰し、循環する構造をもたらすのである。月光が高い天空に懸かることを示す「山月」という言葉があるから、「挙頭」「低頭」という往復の動作が生ずるのである。これらの二字はこの詩の関鍵である。それが、前述のように発音の變化から平仄の「不具合」が起こり、明代において「おのれから古えは始まるといわんばかりの」（入矢義高著『明代詩文』筑摩書房一九七八年所収「擬古主義の陰翳」李攀龍によって改竄がなされたのである。決して「人民大衆」がその世論でもって改変したのではない。中国の人々は、改竄された「静夜思」の本文を明代後半以後、『唐詩選』から『唐詩三百首』に至る「暗誦用テキスト」によって数百年も脳裏に「刷り込まれ」ているから、その本文が「身に付いて」いて、馴染み深いに過ぎない。地球上に展開する十数億もの中国の人々が皆そのように「身に付けて」い

るとすれば、それが元に戻る可能性は皆無と言って過言ではなからう。しかし、日本（と内外の版本）で伝承された李白本来の「静夜思」本文を嘲笑したり、否定したりするのはどうかと思う。その行為は、取りも直さず中国文化の精華と李白という優れた詩人を自ら否定することに他ならないのだから。

二つめの問題はいまだ判然としないところがある。つまり、一九九〇年の南京における口頭発表でもはっきりと明代の李攀龍『唐詩選』が改竄したことを述べておいたのだが、前掲の如く、その後の中国の研究者の見解はすべて清朝人による改変ということになってしまっている。つまり明人の仕事を一切無視している、と言ってよい。まるで明代の、それも李攀龍のことに言及するのが一種の禁忌でもあるかのようである。これは非常に奇異な現象である。そもそも李攀龍『唐詩選』の版本が中国に一部も残存していないのなら、それも無理からぬことと言える。しかし、例えば上海復旦大学図書館特蔵室に「王禪登参評万曆吳興凌氏精刻朱墨套印本」という珍しい李攀龍『唐詩選』が所蔵されていて、拙文『復旦大学図書館特蔵室蔵書目録覚書』（関西大学中国文学会紀要第十七号一九九六年）で報告し、図書館の御好意で拙著『唐詩新攷』の口絵写真に使わせて頂いた。また、楊繩信編『中国版刻綜録』（陝西人民出版社一九八七年刊）の「明代版刻」の章に「武林一初齋 李攀龍輯蔣一葵箋积唐詩選（万曆二十年刊）」が南京大學図書館の所蔵として記されている。さらに、同じ年に同じ陝西人民出版社から出版された孫琴安著『唐詩選本六百種提要』には、「我が国古代の著名な唐詩選本（我国古代著名的唐詩選本）」（一二七頁）として紹介されている。この書には、ほかに上記の王禪登参評本『李攀龍唐詩選』の解題もある（一六八頁）。中国では散逸してしまったものが多いだろうが、李攀龍『唐詩選』が明末から清初にかけて大流行したことは、『唐詩合選』『唐詩廣選』や清朝初期

の呉呉山による『呉註唐詩選』に至るまで、数多くの『唐詩選』系列版本で分かる。そして、この系列諸本では例外なく「明月」を二度用いる本文を踏襲していること拙論で述べたとおりである。

それでは、右のように李攀龍『唐詩選』の存在と重要性が一部ではあるが中国の研究者に認知されているのに、すべて無視するのは何故か。恐らく中国の研究者達は『唐詩選』万曆刊本の存在と、そこに「明月」を二度用いる中国社会現行の本文が存在していることに気付いてはいるのだろう。それなのに李攀龍の改竄を認めず、あくまで清朝人の「優れた改変」として譲らないのは、『四庫全書』と、その『提要』を中心とする清朝の乾嘉の学の栄光に現行の本文の由来を委ねて権威付けたいのであろう。張天健氏の「乾隆御定《唐宋詩醇》」という書名の記述を見ていると、失礼ながら彼らは清朝を「本朝」として意識しているのではないかとさえ思ってしまう。或いは、その背後に出版事業の裏に潜む所謂政治的圧力が存在するのも知れない。いずれにしても中国の古典研究のために汚点を残すことになるのは否めない。

おわりに

かつて大学院生だった時に、授業で『十三經注疏』で「詩經」の一部を読まされたことがある。「詩經」が成立してから数百年後、士大夫社会が成立し、中国社会の変容を経た後に作られた古注と、その後千余年間の注釈とのいわば「辻褃合わせ」の大海に辟易した。指導をして下さった先生ご自身、時に首をかしげておられた記憶がある。一旦ある種の権威をもって登場し、それが人々の脳裏に「刷り込まれる」と、暗誦主義の中国社会で記憶は長く影をひく。唐詩自体、千年以上も受け継がれ伝承されているうちに、時代時代の趣味や思潮によって変転を余儀なくされるのは

致し方ないことと言えよう。しかし、今日伝わる貴重な資料を全く無視して、「一切が無かったように」判断を停止してしまふのは、こと学术研究にとって自殺行為としか思えない。不幸なことに、中国における古典文学研究は、政治的な混乱と重圧の下で、或る分野は学問の伝統さえ途絶え、自国の文化を本国人として最先端を行けない状況もたらした。改革開放経済が始まって、経済は順調に拡大を続けているようだが、李白「静夜思」本文の扱いひとつを見ても、出版点数の膨大さに反して、なかなか唐詩研究の水準自体が高まらない。結局、唐詩が現在に至るも「生きている」文学の一部であり続けることによって、対象化されない或いは対象化しえない状況が然らしめているのだから。

古典文学研究は、まずもって「その作品がその時代の人々にどう読まれていたか」を探求しなくてはならない。後世の異なった王朝・社会の感覚で読もうとすることに、研究者たるもの一定の距離を置かなくてはならない。とすれば、現代において唐代の文学を研究する場合、一番大切なことは清朝の専制君主が作り上げた学問の壁を乗り越える、つまり『四庫全書』『四庫提要』を一度は疑ってかかる必要があるということだろう。『四庫提要』が意図的に「偽書」という烙印を押しただからと言って、明代後半から清初にかけて絶大な影響力をもった李攀龍『唐詩選』の存在すら無視しては、研究は成り立たない。さらに、宋元明清を通じて旧注がもっとも多い杜甫の詩への注釈でさえ、まったく十全とは言えないこと、近年拙稿で考察したとおりである。「旧注のどれが正しいか」という研究は、もはや超克しなければならぬだろう。「清朝の学問を祖述すること」をもって能事としていては、真実は見えて来ず、発展もありえないということである。(二〇〇五年九月稿)